

〈彫刻〉と〈工芸〉—近代日本の技と美 展

主催：静岡県立美術館
 助成：財団法人 地域創造
 会期：平成16年8月24日(火)～10月24日(日)
 休館日：毎週月曜日(9月20日、10月11日は開館。
 9月21日、10月12日休館)

前年度、当館では展覧会「もうひとつの明治美術」を開催した。この展覧会は、明治時代に本格的に伝来した西洋画の技法を日本人がいかにか消化してきたのか—すなわち日本洋画の歴史—を新しい観点から見直す展覧会として企画された。いわゆる旧派の画家を中心とした地味な展示であったにもかかわらず(あるいはその故にか)この展覧会は、さいわいにして多くの美術愛好者や専門諸家の好評を博すことができた。

「〈彫刻〉と〈工芸〉」は、その流れを汲み、かつて〈工芸〉と呼ばれていた作品群と、高村光太郎、荻原守衛といった日本の近代彫刻を作り上げようとした作家たちの作品群とを紹介し、近代日本の立体造型史を見直そうとする展覧会として企画された。

展覧会の前半では、主として明治時代の彫刻が、近世以来の工芸(例えば木彫や牙彫、あるいは金工や陶芸など)の伝統とどう結びつき、どのように伸展してきたのかを検証した。展示は、ジャンルとしての〈彫刻〉〈工芸〉の盛衰史を絵解きするようなものではなく、境界のあいまいなこれら両ジャンル間の往還もしくは相互作用の痕跡をたどるものを目指し、これら近代日本の立体造形作品からこの時代の美意識が見えてくるように気を配った。

また、展覧会の後半では、日本における〈彫刻〉概念の確立や用語の規定に大きな役割を果たした高村光太郎ら近代彫刻の作家たちにスポットを当てた。明治末から大正にかけての彼らのロダン彫刻をはじめとする西洋近代彫刻の受容そして制作活動は、現代のわれわれの〈彫刻〉の見方にも濃密な影響を与えている。そして、〈工芸〉から〈彫刻〉への脱却をはかりつつ、なお彼らのうちに保たれていた近世以来の造型意識(それを〈工芸的なもの〉と呼んでもよからう)を探ってゆくことを目指した。

本展は、これら二つの問題意識を立脚点として、近代日本における〈彫刻〉とは何かを問うものとなった。静岡県立美術館ロダン館は開館10周年を迎えた。ロダン館を通じて常に〈彫刻〉についての根源的な問いを美術界に投げかけようと努力してきた当館にとって、本展覧会は大きな意義を持つ展覧会となった。

■カタログ

- ・27.0×21.5cm(A4変形)168ページ
- ・エッセイ
 「〈彫刻〉と〈工芸〉—近代日本の技と美
 企画ノート」 村上 敬
 「彫刻—不在の風景」 堀切正人
- ・作品図版、作家・作品解説、作品リスト、関連事項年表、参考文献

■テレビ放映

- ・NHKたっぷり静岡「おでかけナビ」
 平成16年9月10日
- ・NHK新日曜美術館「アートシーン」
 平成16年9月19日

■新聞報道

- ・平成16年9月9日静岡新聞朝刊
 「タカ12羽 実は彫刻 県立美術館」(無署名)
- ・平成16年10月9日朝日新聞夕刊
 「一展逸点 今日性はらむ初々しさ
 寺内信一 裸婦」(編集委員・田中三蔵氏)



▲ ポスター

- ・平成16年12月13日朝日新聞夕刊
「回顧2004 美術」(編集委員・田中三蔵氏)
「私の3点」(美術評論家・北澤憲昭氏)
- ・『芸術新潮』12月号
「考える人・考えられない人「〈彫刻〉と〈工芸〉」
—近代日本の技と美」展」(木下直之氏)

■関連事業

- ・学芸員によるフロアレクチャー
平成16年9月5日、12日(日) 午後2時から1時間弱
- ・シンポジウム「〈彫刻〉と〈工芸〉」
平成16年10月3日(日) 午後2時～3時30分 講堂
パネリスト(五十音順)
大熊敏之氏(宮内庁三の丸尚蔵館主任研究官)
田中修二氏(大分大学講師)
山下裕二氏(明治学院大学教授)
- ・須田悦弘氏講演会
平成16年10月11日(月・祝) 午後2時～3時30分
実技室
講師：須田悦弘氏(美術家)

■出品目録 72ページ参照



▲ カタログ